

## 第Ⅳ章 まとめ

### 1) 上道郡周辺における製鉄関連遺跡～その概況と評価Ⅱ～

#### 中尾平山遺跡の評価

中尾平山遺跡は本書で報告したとおり、3～4基の横口付き製炭窯が確認された。残念ながら、製鉄炉や工房跡等は発見することができなかったうえに、わずかながらの出土遺物も製炭窯との関係や時期などを判断する情報に乏しく、発掘調査で得られた情報からは、中尾平山遺跡全体の構造や動向、操業期間等を結論づけることは難しい。まずは、限られた資料からではあるが、中尾平山遺跡の内容について可能な限り考えてみよう。

まず製鉄炉に関しては、繰り返しになるが調査においては発見することはできなかった。しかし、3区、4区において大量とはいえないながらも、鉄滓や炉壁が出土していることから製鉄炉が付近に存在したことが予想される。このことはほかの製鉄関連において製炭窯に近接して製鉄炉が存在するケースが多いことから指示されるであろう。

次に、操業期間について考えてみたい。

1区1号窯では、大きく破壊された1号窯との関係が今ひとつ明確ではないが、周辺から二次的に熱を受けた平瓦片が出土していることが注目される。これらの平瓦は、1号窯ではないにしても、製炭窯や製鉄炉などの構造体の一部に使用されていたものとみられ、この時期観が操業期間の一端を示すものと考えられる。出土した平瓦片には瓦当など特徴的な部分に欠けるため限定しがたいが、8世紀代と考えておきたい。また、やはり1号窯との関係に問題があるが、周辺から出土した須恵器片も7世紀末から8世紀初頭のものともみられ、平瓦片の時期観と大きく隔たりがないことが注目される。

3区では2号製炭窯、3号製炭窯の2基が平行して検出された。この2基の先後関係は2号製炭窯前庭部と3号製炭窯の上方溝との切り合い関係から、3号製炭窯→2号製炭窯の順が観察された。このうち3号製炭窯はその焚き口付近の掘り込み底面から出土した須恵器から、TK209併行、7世紀初頭から前半代と推定される。2号製炭窯においても煙出し掘り方などから土師器片が出土しているが、年代の想定しうる遺物は出土していない。

4区4号製炭窯では周辺から須恵器片が出土しているが、やはりこれも時期を限定するには特徴に欠けるものである。製鉄炉では、立地が6世紀にさかのぼるものでは、谷水流との比高差が小さく、新しくなるにつれ急斜面で、比高差の大きい立地となることが指摘されている<sup>①</sup>。多くの場合、製鉄炉と近接して営まれる製炭窯においてもこうした立地の変化が当てはまるとすれば、中尾平山遺跡で検出された製炭窯の中で最も低い位置にある4号製炭窯は3号製炭窯に先行して操業されていた可能性もある。

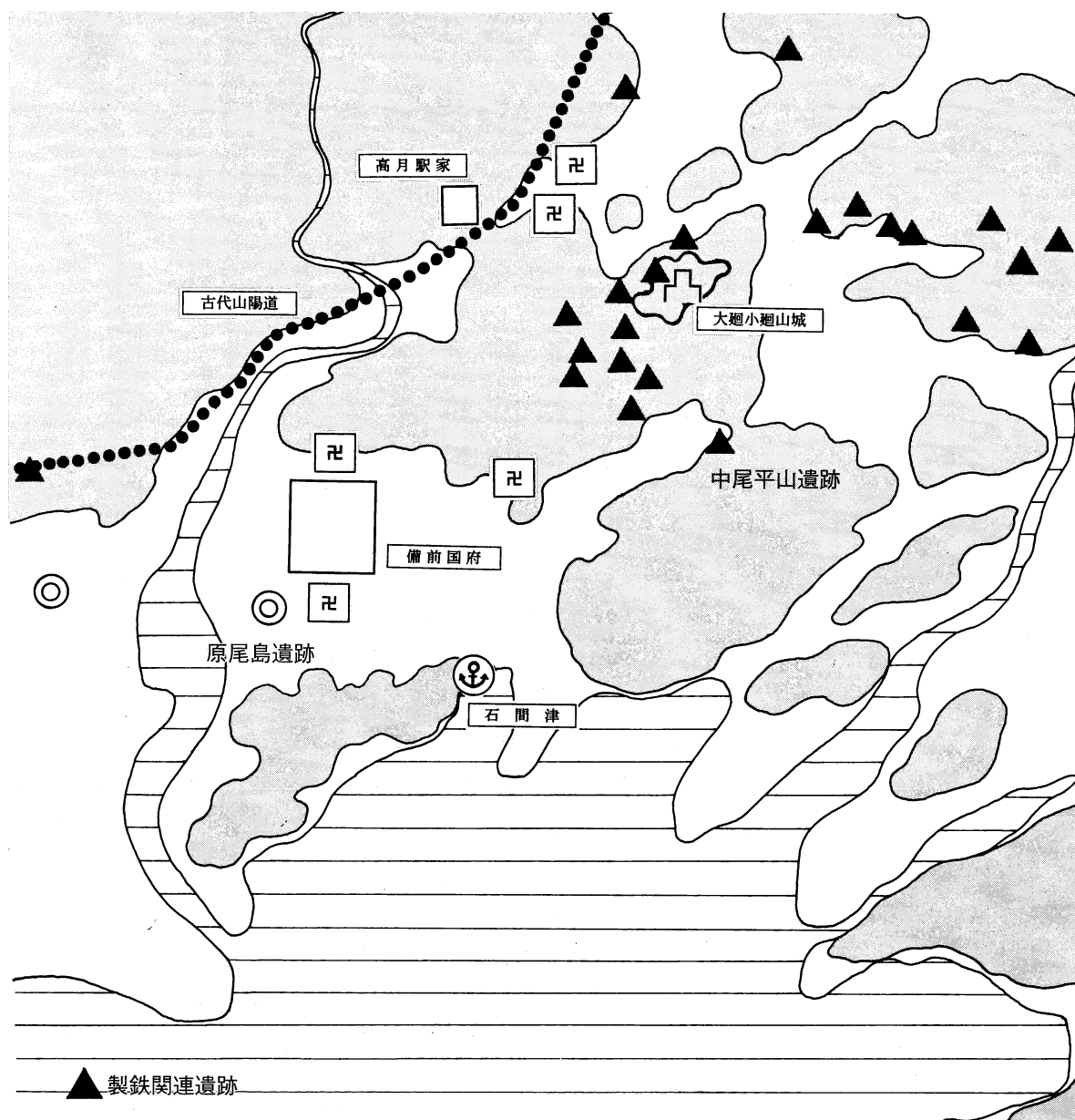
もちろん、この遺跡の範囲内で連続的に操業されていたのか、周辺の他地点とを行き来しつつ結果的にこうした長期の操業となったのかは判断しがたい。しかしながら、中尾平山遺跡は少なくとも7世紀前半代から8世紀初頭、百年ほどにわたって操業された製鉄遺跡群といえる。

### 上道郡周辺における製鉄関連遺跡の状況

西祖山方前遺跡の報告において、「上道郡における製鉄関連遺跡－その概況と評価－」と題し、上道郡域を中心とする製鉄関連遺跡について分布状況や展開、備前における鉄生産を含め整理がなされた<sup>(2)</sup>。今回、その追求の過程で発見された中尾平山遺跡の調査を経て明らかにされた内容を加え、再び整理してみたいと思う。

上道郡周辺の製鉄関連遺跡の分布状況は、「概況と評価」から大きく変化はなく、その多くは小廻山周辺の居都郷、日下郷に集中しているが、時期などを推定しうる資料に乏しく、その展開は未だ未解明の部分が多い。中尾平山遺跡においても前段で時期の推定など行なったが、製鉄炉などの検出はなく評価となると課題が大きい。そうした中で注目されるのが、上道北方塚段古墳群<sup>(3)</sup>、原尾島遺跡<sup>はらおじま</sup>（藤原光町3丁目地区）<sup>(4)</sup>である。

上道北方塚段古墳群では、塚段1号墳、同2号墳、坂口古墳の3基が調査されている。このうち1号墳からは金層ガラス玉をはじめとする多彩な玉類とともに、羨道部から鉄滓



第22図 7～8世紀における上道郡周辺の状況

が出土している。6世紀中葉に築造され7世紀初頭まで追葬されていたとみられており、鉄滓がそのどの時点に伴うものかはわからないが、この地域での製鉄が6世紀後半代にさかのぼる可能性を示すものといえる。この古墳の被葬者は、中尾平山遺跡を含め、小廻山西南麓に展開する製鉄関連遺跡に深い関わりのある人物とみて間違いのないであろう。第I章でもみたが、この地域には古墳時代前期から中期を通して目立った古墳が築かれておらず、後期に集中することが知られており、こうした古墳の展開も製鉄遺跡の展開と無関係ではないものと思われる。

また、旭川東岸平野に位置する原尾島遺跡では、7世紀前半とされる溝などから鉄鉱石、炉壁、鉄滓、羽口が出土している。原尾島遺跡は沖積平野の微高地上に立地する遺跡で、これまで確認されている製鉄遺跡が山腹や丘陵部に立地するのとは好対照である。特に、原尾島遺跡から出土している炉壁には流紋岩や泥岩・頁岩の角礫が含まれていることが報告されており、遺跡周辺の土で作られたものではなく、山腹や丘陵部の製鉄関連遺跡周辺で採取された粘土を使用したものか、そうした遺跡から炉壁ごと持ち込まれたものの可能性が高い。次段でも述べるが、丘陵部の遺跡において製錬を行い、沖積地部の遺跡で精錬、鉄器生産を行うといったような分業体制にあった可能性もある。

さらに周辺の地域では、赤坂郡に属する砂川流域の山陽町<sup>さいとみ</sup>斎富遺跡<sup>(5)</sup>、津高郡に属する白壁奥遺跡<sup>しらかべおく</sup><sup>(6)</sup>、猪ノ坂南遺跡・奥池遺跡<sup>いのさかみなみ</sup>など津高住宅団地内遺跡群<sup>(7)</sup>、御津町みそのお遺跡<sup>(8)</sup>、和気郡に属する和気町石生天皇遺跡<sup>いわぶてんのう</sup><sup>(9)</sup>、最近では熊山町猿喰池製鉄遺跡<sup>ざるばみいけ</sup><sup>(10)</sup>などで製鉄関連遺跡が調査されている。

さて、こうした製鉄関連遺跡の立地としては、備前国の政庁・備前国府、国庁が上道郡の西部、旭川東岸平野の岡山市国府市場周辺に想定されており、上道郡衙もおそらくこれに近接して存在するものと思われるなど政治的中心地に近接する立地であるということが指摘できる。この周辺には飛鳥時代創建の賞田廃寺<sup>(11)</sup>をはじめ、幡多廃寺<sup>(12)</sup>、居都廃寺などの古代寺院が存在するほか、上道郡北隣の赤坂郡南部の平野部に備前国分寺・国分尼寺が所在する。一方、中尾平山遺跡の所在する上道郡東部には、古代山城・大廻小廻山城<sup>(13)</sup>が築かれる。さらに、国府付属の港湾施設といわれる「石間江」が岡山市当麻周辺とみられており、官道・山陽道は赤坂郡南部の平野部を通り、山陽町馬屋に高月駅家が想定されているなど、交通の結節点でもある。

### 備前地域における鉄生産の展開

ここまでに見たように、上道郡、赤坂郡2郡にまたがりながらも、この地域はまさしく備前国の政治的中心をなしている。神谷正義は岡山県の製鉄関連遺跡の分布を整理し、製鉄関連遺跡集中地が必ずしも鉄鉱石産出地に一致しないことを指摘している<sup>(14)</sup>。この製鉄関連遺跡の集中地の分布をみると、備前国府の所在する旭川東岸平野を中心にA1=上道郡・磐梨郡、A2=上道郡・赤坂郡、B1・2=津高郡の各群が、備中国府の所在する総社平野を中心にC=賀陽郡、D=下道郡の各群、備後国府に近接してE=小田郡、美作国府の所在する津山盆地周辺のF=勝田郡・苫東郡とみることができる。

また、宇垣匡雅は、先にあげた原尾島遺跡の評価を製鉄関係遺物の分析から「原尾島遺跡の集団は鉄鉱石の入手と選別・粉碎を受け持ち、製鉄は砂川流域の丘陵部において行われる。それによって生産された鉄塊は再び原尾島遺跡に戻され、精錬作業が行われる。」と

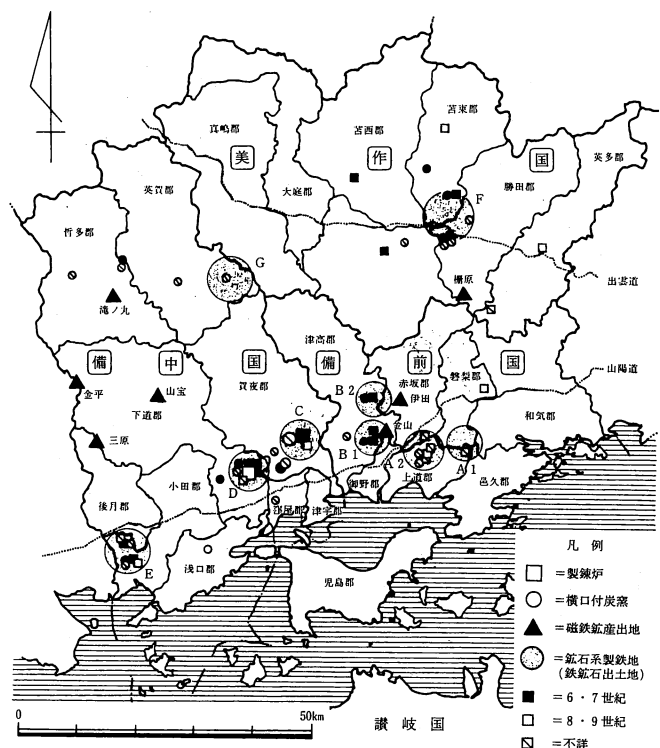
考えた<sup>(5)</sup>。原尾島遺跡出土の炉壁については、炉壁粘土の採取地として、製鉄関連遺跡の分布も鑑み、岡山市東部から瀬戸町付近が候補にあげられている。この炉壁粘土の特徴は、科学的な分析を経ていないものの、中尾平山遺跡周辺の地山や出土炉壁を彷彿とさせる。旭川西岸においても、津島遺跡において6世紀代に位置づけられる住居跡内から鉄鉱石、精錬滓、板状鉄片などが出土しており<sup>(6)</sup>、周辺－津高郡の製鉄関連遺跡群との同様の関係も想定しうる。

以上から、備前地域における鉄生産は、地域小集団を超えたレベルで鉄鉱石の入手から選別、粉碎、製錬、精錬などの工程が分業的になされているとみられる。おそらくそれは製

鉄関連遺跡の集中地が国府など政治的中心地を中心に分布することから、官主導のものであったと思われる。神谷は8世紀代の美作における官営鉱山の可能性を物語る史料として『日本霊異記』の鉄穴記事<sup>(7)</sup>をあげているが、備前においても同様に鉄鉱石の採掘から鉄生産までが官主導で行われていた可能性が高い。

こうした官主導の鉄生産の開始については、現在のところ6世紀後半をさかのぼる製鉄の確実な証拠がないため定かではない。しかし、5世紀後半ごろに位置づけられる岡山市一本松古墳<sup>(8)</sup>、総社市随庵古墳<sup>(9)</sup>などからは鉄鉗、鉄鎚といった鍛冶具が出土しており、被葬者は鉄器生産に関わる一面をもつ人物と思われるが、これらが、畿内政権とのつながりも指摘される「帆立貝形」の古墳であることが注意される。すなわち、5世紀後半代には製鉄に関する確実な証拠はないものの、鉄器生産においては、それを掌握する中小首長に対し畿内政権からのある程度の組織化、掌握の動きがあったものとうかがわれる。

最後に、こうした鉄生産の衰退について若干ふれてみたい。ここで注意されるのは、『類聚三代格』巻八の延暦15(796)年の太政官符「応停止備前国進鉄事」である。たしかにこれまで調査された製鉄関連遺跡は8世紀末以降に下るものは多くなく、こうした傾向は備前地域に限らず備中、美作においても同様といえる。しかし、石生天皇遺跡で8世紀末～9世紀とされる製鉄炉が確認されているほか、備前東部地域の製鉄関連遺跡の調査例が少なく、時期の判明しているものもほとんどないことから、今後こうした時期の下る製鉄関連遺跡が見つかる可能性は大いにある。しかもその地域が後に備前刀生産の中心的地域となることからすると、こうした記事をそのまま受け取ることには疑問を感じざるを得ない。また、8世紀代の備前東部地域は、和気清麻呂の中央政界での栄達とも関連し、郡の新設、郡界の移動が頻繁に行われており、この太政官符が発布された延暦15年は清麻呂が従三位、造宮大夫にのぼった年であることを考えると、想像を逞しくすれば、和気氏一



第23図 製鉄炉・横口付製炭窯分布概念図  
注(2)文献より

族による鉄生産の掌握といった利権が絡んでのものとも思われる。

こうした想定は現在のところ想像の域を出るものではない。また、備前刀の生産についても、製鉄関連遺跡が盛んに操業される6世紀末～8世紀代との間を埋める資料はほとんどない。今後、この地域の製鉄関連遺跡が追究される過程で、こうした「欠けた輪」が埋められていくことに期待したい。

## 注

- (1) 武田恭彰 1999「製鉄遺跡について」『奥坂遺跡群－鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴う発掘調査－』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 総社市教育委員会
- (2) 神谷正義 1994「上道郡における製鉄関連遺跡－その概況と評価－」『西祖山方前遺跡・西祖橋本(御休幼稚園)遺跡－岡山市浦間・西祖地区における遺跡の展開－』岡山市教育委員会
- (3) 岡山市教育委員会 1984『上道北方坂口古墳・塚段1号墳・塚段2号墳発掘調査概要』(現地説明会資料)
- (4) 宇垣匡雅ほか 1999『原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139 岡山県教育委員会
- (5) 伊藤 晃・下澤公明ほか 1996「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告105』山陽自動車道建設に伴う発掘調査13 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- (6) 正岡陸夫・下澤公明 1998「白壁奥遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告128』山陽自動車道建設に伴う発掘調査16 日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会
- (7) 岡山市教育委員会 1991『津高住宅団地造成地内遺跡発掘現地説明会資料』
- (8) 椿 真治・氏平昭則ほか 1993「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告87』県営御津工業団地造成工事に伴う発掘調査 岡山県教育委員会
- (9) 近藤義郎 1980『石生天皇遺跡』和気町
- (10) 熊山町教育委員会 2002『猿喰池製鉄遺跡発掘調査現地説明会資料』
- (11) 伊藤 晃・出宮徳尚・水内昌康 1971『賞田廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (12) 出宮徳尚・根木 修・間壁忠彦・間壁葎子・水内昌康 1975『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (13) 出宮徳尚・乗岡 実 1989『大廻小廻山城跡発掘調査報告』岡山市教育委員会
- (14) 注(2)文献
- (15) 宇垣匡雅 1999「調査の成果」『原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139 岡山県教育委員会
- (16) 時實奈歩 2001「岡山県陸上競技場改修に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告31』岡山県教育委員会
- (17) 「将寫法華經建願人断日暗穴頼願力得全命縁 第十三」『日本靈異記』巻下
- (18) 近藤義郎 1986「一本松古墳」『岡山県史』第18巻 考古資料 岡山県
- (19) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葎子 1965『総社市随庵古墳』総社市教育委員会